

第三回エズラ・パウンド会議覚え書

安 川 旦

昨年（一九七七年）九月九日から十二日まで、第三回目の「エズラ・パウンド会議」(The Ezra Pound Conference)が、ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジで開催された。私は、日本からただ一人の代表として出席したので、ここにこの会議の模様を報告しておこうと思う。

「第三回エズラ・パウンド会議」は、ユニヴァーシティ・カレッジ (University College London) のステイヴン・フェンダー (Stephen Fender)、『アルスター大学 (New University of Ulster) のウォルター・バウマン (Dr. Walter Bauman)』そしてキール大学 (University of Keele) のリチャード・ロウ (Richard Law) が組織・運営にあたり、ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジで開催された。参加者は、ほとんど全員、ユニヴァーシティ・カレッジのラムジー・ホール (Ramsey Hall) に合宿した。誰もかもパウンドによる絆を意識し、アカデミックな議論の合間には、親密で、なごやかな談笑に時のたつのを忘れ、パウンド研究のためにも、また人間的にも実りの多い四日間を共に過ごした。

今回第三回をむかえたエズラ・パウンド会議は、一九七六年に英国で開催された一連の米国独立二百年記念行事の一環として、シェフィールド大学 (University of Sheffield) で四月二十一日から二十三日まで開かれた「パウンド資料の展示と会議」(The Pound Exhibit and Conference)を継承するもので、このシェフィールド会議の最終日に、米国メイン州立大学のテレル教授が、世界中のパウンド研究の現状を報告するとともに、このような会議が今回の一度で終わることなく、パウンド学者やパウンドの関係者が集う機会を継続的にもつことを提案した。出席者の賛同を得たので、シェフィールド会議の運営にあたったグローヴァー博士 Dr. P. R. Groves) を司会者として、パウンド会議開催に関する会議が行われた結果、パウンド研究の会議を継続的に開催すること、そして、当分の間は英国の大学でそれを行うことが決定され、次回はシェフィールド大学のグローヴァー博士、アルスター大学のバウマン博士、キール大学のリチャード・ロウを世話人として、同年（一九七六年）九月二十日から二十三日までキール大学 (University of Keele) で

開催されることになった。(この第二回パウンド会議には神戸女学院大学の三宅晶子女史が出席した。)シェフィールド大学の会議は、シェフィールド大学英文学科のグローヴァー博士と、エズラ・パウンドの令息オウマー(Omar Pound)のあいだで、アメリカ現代詩の展示会と談話会を開催しようという話が熟した結果開かれたもので、「パウンド資料の展示と会議」とうたわれたシェフィールド会議が、オウマーのアラビアやペルシャの詩の翻訳の朗読によって開始された事実でもわかる通り、詩人や学者と縁故者の出席した、半ばアカデミックで、半ば文学サロンのな集いであった。この傾向は、よりアカデミックな研究会となった第二回及び第三回の会議にも生きている。「エズラ・パウンド会議」を人間的なものとしているように思われる。

(因みに、エズラ・パウンドのための国際的な集いは、すでに、シェフィールド会議の前年一九七五年に、米国のメイン州立大学オロノ校(University of Maine at Orono)で、六月十五日から十七日まで、「エズラ・パウンド生誕九十周年記念シンポジウム」(Symposium to Celebrate the Ninetieth Birthday of Ezra Pound)が開かれている。初日の夕食会に西田駐米大使が招かれて開会の挨拶をしたと伝えられている。このシンポジウムは、テレル教授(Carroll F. Terrell)の肝煎りで開催の運びとなったものであり、一九八五年の生誕百年記念には一層盛大なシンポジウムを予定しているという。なお、一九七五年の「エズラ・パウンド生誕九

十年記念シンポジウム」には、明治学院大学の新倉俊一氏が出席した。)

「第三回エズラ・パウンド会議」の公式参加者は三十八名で、当然ながら英国人がもっとも多く、米国人がそれに次ぐ。英米人以外の参加者は、ドイツ、ヨルダン、そして日本から各一名というさびしさであった。出席を予定していたイタリア及びフランスの代表は、たまたま長期化して解決の見込みのたないヒースロー空港のストライキのために出席を取り消したということであった。公式参加者以外に、英国の大学院生が、期間中、常に十名以上が聴講し、時には議論に加わり、また司会さえした。

第一日。九月九日(金)三時、ユニヴァーシティ・カレッジのラムジー・ホールで登録。宿泊の部屋割をうけて五時まで休息。五時十五分からシェリー・レセプション。ここで出席者の紹介、自己紹介などがあって、テレル教授やウィルヘルム教授をはじめ高名な学者の面識をえる。夕食後八時から、ギュスターヴ・タック記念講堂(Gustave Tuck Theatre)で、米国スタンフォード大学のデイヴィ(Donald Davie)教授の「エズラ・パウンドと英国人」(“Ezra Pound and the English”)と題する公開講演をきく。そのあと、九時から図書館のギャラリー(Flaxman Gallery)でポートワインのレセプション。続いて「雑誌にみられるエズラ・パウンド」(“Ezra Pound in the Magazines”)と題する、パウンドの関係した雑誌類の貴重なコレクションの展示会の開会式があった。この展

示会は九月九日から十月十四日まで一般公開されるものであった。

第二日。九月十日(土)九時三十分から、ギュスターヴ・タック記念講堂で、ニューヨーク大学 (University of New York) のロウゼンタール (M. L. Rosenthal) 教授の「エズラ・パウンドは偉大な詩人だったか、ともかく、『カントウズ』を見てみよう」 (“Was Ezra Pound a great poet? Well, let's look at the *Cantos*”)と題するウイットとユーモアに富んだ講演があった。パウンドを愛する集団の前で話すのでパウンドは偉大だったと言うわけではないが、やはり、パウンドは偉大な詩人だったと結論を先に述べて、皆さんを安心させておかねばなるまい、とって教授は聴衆を笑わせ、『カントウズ』解釈について示唆に富む話を展開した。コーヒー・ブレイクのあと、評議員室 (Council Room) で十一時三十分から午後一時まで、「カントウ第九十章」に関する討論会。昼食後、二時半から四時まで「カントウ第九十一章」に関する討論会。コーヒー・ブレイクのあと四時半から六時まで、「カントウ第七十章」に関する討論会があった。これら Canto XC, Canto XCI, Canto CVII に関する三つの Session が今回のエズラ・パウンド会議の眼目だった。この討論会のための「いわば、叩き台として、テレル教授の『注解の草稿』 (Draft of Glosses for Canto 90, Canto 91, and Canto 107, prepared by Carroll F. Terrell for the Ezra Pound Conference held at University College London, September 9-12, 1977) が配られた。

第一回目の討論会が、ツインマーマン (Zimmermann) 教授の提案により、ラトガズ大学 (Rutgers University) のウィルヘルム (James Wilhelm) 教授の見事な「カントウ第九十章」の朗読によって開始されたとき、非常に自由な、文学サロンの討論会になるものと予想されたが、そして、事実、ジムの朗読はドラマティックすぎるのではないかとあって、別の朗読を試みようとする人もあつたぐらいであるが、やがて、出席者一同、目の前にあるテレル教授の『注解草稿』の重みを意識しはじめ、限られた時間を有効に生かすためには、この『注解』を順番に検討していくのが最上ではないかという意見が出て、一同賛成、それ以後は、午後の二回の討論会も、テレル教授を中心に、この『注解草稿』を検討し、誤りを正し、補うべきものを補う方法で進化した。テレル教授を中心に準備が進められている “The Companion to the *Cantos*” がより充実したものとして、一日も早く出版されることを一同願っているために、自然このような結果になったのである。

第三日。九月十一日(日)九時三十分からラムジー・ホルルのラウンジ (Extention Television Lounge, なお、当日の行事はすべてこの部屋で行われた) で、ニューヨーク大学、フアロー校 (University of New York, Buffalo) のサルヴァマン (J. P. Sullivan) 教授を司会者として、十一時まで、「プロペルティウス・セクション」 (Propertius Session) があった。討論会のはずであったが、実際は、ラテン文学者のサルヴァマン教授によるプロペルティウ

ス講義とエズラ・パウンドのプロペルティウス翻訳の特色と意義についての講義となった。討論は、わずかに、パウンドの翻訳法について、出席者の数人が意見を述べたにすぎない。コーヒー・ブレイクのと十一時三十分から十二時三十分まで、「経済学セッション」(Economics Session)があった。

エズラ・パウンドと経済学は重要なテーマであり、特にパウンドの高利や高利貸しについての考え方は、戦争中のパウンドのムッドリーニ支持の問題にもつながるもので、解明しなければならぬ。そのため、今回の会議にも、パウンドの経済学討論の時間が設けられたのだが、組織・運営にあたったフェンダー教授らの努力にもかかわらず、パウンドに興味をもつ適当な経済学者が得られなかった、ということであった。それでこの討論会をどうしたものだろうかと諮られたが、出席者一同経済に暗いものばかりで困惑したが、疑問を出し合うだけでも意義はあるというものの、さて司会を引き受ける者がなかった。その時、大学院生から、もしお許しいただけるなら、そして、相補えるよう二人でやらせていただけなら司会をしてもよいという申し出があった。その二人の大学院生の名前を記憶にとどめることができなかったが、パウンドをよく読み、また、パウンドの政治的・経済学的方面についてよく考えているのに感心した。午後は、ロンドンのエズラ・パウンドゆかりの土地や建物を訪ねる人たちのための自由時間とされており、昼食の際に、ガイド・マップを作成したユニヴァーシティ・カレッジの大学院生の説明

があった。パウンド関係地巡回に行かない人のために「エズラ・パウンドと科学」(“Ezra Pound and Science”)という討論会が用意されていて、キール大学のベル(L. F. A. Bell)氏とヨーク大学(University of York)のケイマン氏(M. A. Kayman)が司会をつとめた。私は、パウンドゆかりの土地や建物をすで見ているし、会議終了後、ゆっくり再訪の予定でいたので、この討論会に出席したのだが、正直に言って、殆んど理解できなかった。多くの出席者も同様でなかったかと思う。というのは、この討論会での発言者はもっぱら大学院生たちで、むつかしい科学用語を駆使し、しかも非常に早口で論争するのである。議論はいつかパウンドを離れて、文学者と科学という一般論になってしまった。

七時から総会(Business Meeting)が開かれた。今回の会議の組織・運営にあたった三名の委員を代表してユニヴァーシティ・カレッジのフェンダー教授から経過報告と会計報告があった。ついで、次回の開催地をどこにするかについて論議された。イタリアやフランス、あるいはドイツで開催することを提案するものもあったが、例えば、ドイツの物価高とか、イタリアの場合、例えば、パウンド令嬢のブルネンブルクで開くとして、収容能力があるだろうか、とか、交通の便がよくないことなど、次々と疑問視する人がでて、将来、ヨーロッパ大陸で開催する場合の候補地について、それぞれ事情に詳しい人たちに調査しておくことを依頼しながらも、結局、いろんな意味で、英国が、世界中のパウンド学者が集まるのに、い

ちばん便利だということに意見が一致した。また、「パウンド会議」は英国の大学で開催する国際会議として出発したのだから、将来は別として、すくなくとも次回は英国の大学で開催するべきではないかという意見が若い英国人のあいだに強く、第四回パウンド会議は参加者一同の賛成を得て英国の大学で開かれることになった。そして、ダラム大学のスアマン博士の決断により、ダラム大学 (University of Durham) を開催予定地と決めて総会は終わった。(その後、スアマン (Diana Surman) 博士から、大学の了承を得て「エズラ・パウンド会議」をダラム大学で開催する。一九七九年四月二十日から二十三日までを予定していると連絡があった)

総会の席で、将来、ヨーロッパ大陸で、そして、やがては遠い日本で「エズラ・パウンド会議」を開くことも考えよう、という提案がなされても、私には、まだ、日本での開催を積極的に求めることはできなかった。(パウンド学者は、当然ながら、日本に関心をもつ人が多く、個人的には訪日の希望を述べる人もあり、便宜をはかることを約束してきた)

九時半から、英国のオープン・ユニヴァーシティが「二十世紀の詩文学」のコースのためにBBCの協力により製作したばかりの二十五分あまりの短篇映画『エズラ・パウンド』をみた。インタビュアーにに応じて、パウンドの古い友人で詩人のバジル・バンティング (Basil Bunting) がパウンドを語り、パウンドの詩を朗読していくのだが、ブルネンブルクにおける一九五四年のパウンドの姿を短時

間とらえている貴重なフィルムである。(私は、帰国後、同フィルムのビデオ・カセットに収録したものを、ブリティッシュ・カウンスルの斡旋により入手した。それはパウンド資料の一つとして関西大学東西学術研究所に収蔵されている)

第四日。九月十二日(月)朝食後自由解散。私は、テレル教授、パウマン博士、そしてスアマン博士を含むグループにいて別れを惜しんだが、十時半、再会を約して、ラムジー・ホールをあとにした。(昭和五十三年三月三十一日記)